

〈紹介〉

伊藤 漱平 訳

『紅樓夢』

瀬戸内寂聴の現代語訳『源氏物語』が完成を見、注目を浴びている。四百字詰め原稿用紙六千枚を数えるその分量を耳にしただけで、訳業の重量感是十分に伝わってくる。学術的な意味は別として、谷崎（潤一郎）源氏や円地（文子）源氏が、作家の眼から紫式部の内面を窺ったのと同様に、女性作家の手になる平成版『源氏物語』が、所謂古典の精髓を如何に映しているかが評価の分かれ目となろう。

さて、時を同じくして、また日本の源氏に比されることの多い中国の奇書『紅樓夢』が、平成九年十一月平凡社ライブラリーとして面目を一新して登場した。紅樓夢研究の第一人者伊藤漱平先生の手になる全十二冊は、昭和三十年代の平凡社「中国古典文学全集」を初訳として、同奇書シリーズ、続く昭和四十年代の平凡社「中国古典文学大系」・同奇書シリーズ新版及び解説増補を経て、今回が三度目の全面的な改訳となる。（第一冊解説末尾「読者へ」）

今回の改訳では、十年の歳月をかけて同様に改訳されたという先行の松枝茂夫訳（岩波文庫全十二冊）にも敬意を払い、翻訳としてのプライオリティ尊重の立場も手伝ってか、その松枝訳との同趣重複の訳語はほとんど見当らない。加えて、語学的正確さ・注釈の細

密さは、前版を遙かに凌いでいよう。これはもちろん、この約二十年間における中国での研究の進歩に依るところ大であるが、それにも増して、その成果を厳密的確に反映させてみせる訳者の飽くなき探究心を随所に感得せずにはおられない。また、第一・八・九・十二冊に四分割された解説も、新情報を盛り込みながらもすっきりと整っている。これよりすれば、今回の平凡社ライブラリーによる新書版分冊化は、携帯の便に加えて、一般読者にきわめて誠実な訳書を提供したこととなるし、研究者に向けてはきわめて高水準の日本語訳を提供する結果を産んでいると言えよう。

訳者伊藤先生は大正十四年乙丑のお生れ、三十歳代前半に最初の全集所収の七千枚近い翻訳を担当された折、不眠不休にて十歳寿命を縮めたと自ら述べて憚らないので、その言に従えば齢八十路の翁。今回の改訳新版を繙きながら、研究からも既存の訳からも全て離れて、ゆったりとした四度目の改訳が世に問われる日を窃かに期待しているのは小生ばかりではあるまい。往時作家を志されたという先生の、作家的視点・演出による読取りの日本語訳も、きっと楽しいものであらうと予想されるから。

ともあれ、老練な専門家の、時代を越えた日本語訳の妙味を十分に味わいたい。この訳文が醸し出す雰囲気とそのペースこそが、中国清朝の代表作『紅樓夢』が備える独自性、夢の虚構と石の問わず語りに託された作者の用意を、この上なく再現しているに違いないと信じて。

（平凡社ライブラリー。全十二冊。平成九年十一月完結）

丸山 浩明